



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2645号 2015.9.23 発行

【まぜこぜエクスプレス】Vol. 60 つながれば世界は広がる Get in touchが目指す社会 産経新聞 2015年9月23日



理事会に集まった一般社団法人「Get\_in\_touch」のコアメンバー。(奥左から時計回りに) 柏木真由生、那部智史、尾崎ミオ、向笠文崇、西谷ふみえ、今井忠、大柳満、井戸正典、相部多美、東ちづる=2015年7月27日(小野寺宏友さん撮影、提供写真)

誰も排除しない「まぜこぜの社会」をコンセプトに活動を続けている一般社団法人Get in touch。そのコンセプトには強い思いがこめられている。Get

in touchが目指す「まぜこぜの社会」について、今一度、考えてみた。

### 被災地の避難所がきっかけ

「まぜこぜの社会」とは、どんな状態でも、どんな状況でも、誰も排除しない、されない社会のことだ。最近耳にするようになった言葉で言えば、ダイバーシティ、インクルーシブ、ノーマライゼーション、多様性社会などなど…。だけど、これらの言葉はちょっと敷居が高いと感じるかもしれない。だから「まぜこぜ」。簡単に言えば、童謡詩人の金子みすゞの言葉「みんな違ってみんないい」ということ。たくさんの人が知っている言葉だ。しかし、現実はまだまだだと実感している。

駅や空港、デパート、本屋、レストラン、コンサート会場など、不特定多数が集まる「普段」の場所は、まぜこぜになっていない。実は、さまざまな特性、さまざまな状態の人が身近に暮らしているはずなのに。「自分の周りには障がい者とか、あまりそういう人いないんですよね…」という声もよく耳にする。

Get in touchができたきっかけは、東日本大震災の避難所の様子を伝える小さな記事だった。避難所には、普段は外に出づらい人もいた。車椅子の人、自閉症のお子さんとその家族、セクシュアルマイノリティの被災者たちは、避難所で肩身の狭い思いをしたという実態があった。被災した福祉施設の入居者の皆さんの行き場がなく、避難所を転々としているという記事もあった。社会が追い詰められたとき、普段から生きづらさを感じている人がますますつらい思いをするという現実がある。避難所に集まった人たちは、まさに「まぜこぜ」。それは、日本の縮図だったのに…。

### 一緒にいれば、わかる

病気や障がいの特性や特徴について、詳しい知識がなくても、理解が追いついていなくても、とにかく一緒にいる。戸惑っても、ひるんでも、一緒にいればわかってくることもある。「支援する・される」という関係性だけではなく、お互いに支え合うことができるのだとわかってくる。遠慮はいらない、配慮があれば居心地がいいんだ、と。

そんなことを共有するため、体験してもらうため、Getはワクワクするイベントの企画やマイノリティに関するPRを行っている。「まぜこぜエクスプレス」の紙面でも、たくさんのイベント、団体、個人を紹介してきた。人間はなんて多様で、なんてさまざまな

可能性を秘めているんだろう。出会うたびに発見があり、気づきがある。そして、そのたび、人生が豊かになっていく気がする。だから、Get in touchはその名のとおり、「つながる」「つなげる」ということを大切にしている。

### 団体の壁を超えて

これまで23年間、私自身がいろんなマイノリティー団体と一緒に活動して感じているのは、団体はどうしてもその関係者内で完結しがちになるということだ。団体内の仲間意識は高まっても、当事者以外の人への理解の拡散が難しいという葛藤を抱えるところは少なくない。

だからこそ、壁を打ち破り、そんな団体同士がつながったときの突破力、アイデア力、発信力は「1+1=2」以上の無限の広がりがあると思う。

たとえば、4月2日の世界自閉症啓発デーに実施したイベント「Warm Blue Day」では、自閉症の人たちの生きづらさを自分たちの問題でもありと見え、共感した盲の人たち、聾（ろう）の人たち、義足の人たち、LGBTの人たちなど、今まで個別に活動してきた多様な属性をもつ人たちが団体の枠を超えて集まった。実際に一緒に考え、行動することで、お互いの弱い部分を補いあい強みを生かして協力する関係が自然に生まれた。それこそが無限の可能性を秘めた「まぜこぜ」のダイナミズムだと思う。

Let's Mazekoze!

Get in touchのコアメンバーにも、障がい者団体の幹部やLGBT当事者がいて、デザイナー、ライター、PRマンなどのプロフェッショナルと一緒に、まぜこぜのアイデアを話し合う。

立場が異なれば見えている世界も違う。正直、「まぜこぜ」には、わずらわしいことも起こる。面倒だと感じることもしょっちゅうだ。でも、痛みや苦悩のない進化はないのだ。

Get in touchはこれからも変化を恐れず、間違いも失敗もしながら進んでいく。1人で語る言葉は妄想に過ぎないかもしれないけれど、みんなでつながりながら歩めば道になっていくと信じて。(女優、一般社団法人「Get in touch」代表 東ちづる／撮影：フォトグラファー 小野寺宏友／SANKEI EXPRESS)

## 病児に安らぎの音色 東京のNPO定期活動

読売新聞 2015年9月21日

音楽家やマジシャンらの病院訪問を通じ、闘病中の子供たちを元気付けている東京都のNPO法人「スマイリングホスピタルジャパン」(SHJ)が活動エリアを千葉県内に広げ、今月から定期活動を始めた。

「ありのままの姿見せるのよ ありのままの自分になるの」。9月7日、県こども病院(千葉市緑区)のプレールームに、キーボードの弾き語りで映画「アナと雪の女王」の主題歌が優しく響いた。

声の主は、市川市でピアノ教室を開いている矢田美麗さん(42)。SHJの千葉地区コーディネーターとして、入院中の子供向けに初めて定期公演に臨んだ。最初から聞いていたのは2人だったが、いつもは静かなプレールームに響く音色に興味を持ち、別の病室にいた3人も加わった。硬かった表情は、じゃんけんゲームで和らいでいく。

プレールームでの5曲のほかにも、個室や相部屋の病室を回り、キーボードを運び入れて演奏。乳幼児の病室では、ベッドのすぐそばでショパンの「ノクターン」が響き、心地よさで眠ってしまう子供もいた。この日の曲目は、「きらきら星」、アニメ「ワンピース」や「ドラえもん」のテーマ曲など延べ22曲だった。

演奏のプレゼントを受けた3か月～18歳の約20人は、包帯を巻いていたり、点滴の管を付けていたり病気に闘っている。それでも4歳の女兒は「知っている曲がたくさんで、すごうれしかった」と笑顔を見せた。

自身の子供も同病院に入院した経験がある矢田さんは、「子供や親たちにとって、少しでも心が安まる時間づくりに協力したい。頑張りすぎなくていいんだよ、という思いを全て

の曲に込めている」と話していた。

2012年に設立されたSHJの代表は、東京都内の院内学級で担任を務めた経験がある松本恵里さん（55）（東京都杉並区）。院内学級で外部から劇団や演奏家を招いたイベントを開くと、不安で沈みがちな子供たちが一転して生き生きとした表情を見せたという。

「入院中の子供に本物の芸術を届けたい」。そんな思いで退職し、SHJを設立した。ピアニストやオペラ歌手、マジシャンらプロの約70人の登録を受け、今年9月現在の活動の場は、北海道や京都など8都道府県14施設に広がった。

小児病棟では、面会が保護者に限られていることが多い。松本さんは「きょうだいや友達に会えなくても、不安やストレスを乗り越えられる笑顔を届けたい」と意欲的だ。登録アーティストには年1回の健康診断などを義務づけ、感染防止対策にも取り組んでいる。

県内では、県こども病院で矢田さんが月1回ペースで定期公演を開く。問い合わせはスマイリングホスピタルジャパン事務局（03・6765・6883）へ。（石川奈津美）

### 高校と医療機関協定…千葉

読売新聞 2015年9月21日

医療、福祉コースを設けている千葉県鴨川市の県立長狭高校は、同市の亀田医療大など亀田総合病院グループの3法人との間で教育連携協定を結んだ。協定では「互いに保有する資産や情報、知識、技術を用いて授業や実習などの効果的な運営を図り、地域の医療従事者の育成に資する」などとしている。

同高は普通科校だが、昨年度から2年生からの文系に「福祉」、理系に「医療」のコースを設けた。初年度は1年生のコース選択に向けた基礎学習をする際、主にグループ側から講師を派遣してもらった。今年度はその1年生が2年生になり、両コースの生徒が大学や病院に出かけて実習や研修を受ける機会が増えたことから協定を結んだ。

18日の調印式で、長狭高の渡辺隆校長は「地域のニーズに合った連携で、生徒たちに高いレベルの教育を確保できる」と語った。医療機関が大展開する地域ならではの協定で、県教委は医療機関と公立高の「高大」、「高民」の連携について、「県内で初めて」としている。

### 徘徊高齢者を早期発見せよ 高崎市がGPS貸与と警察連携の全国初取り組み

産経新聞 2015年9月23日



靴にリストバンド…。最小サイズのGPS機器の携行補助具にはさまざまな形が考案されている＝高崎市役所

高崎市は、衛星利用測位システム（GPS）機器の無償貸与や、救援活動などを市が取り組む徘徊（はいかい）高齢者早期発見システムを10月にスタートさせると発表した。同時に高崎署とも協力し、位置情報を提供することで遠方での迅速な保護も可能とする。市介護保険課

では「機器の貸与に止まる自治体が多く、警察との協定も含め全国初の取り組みになる」と話している。（椎名高志）

「はいかい高齢者救援システム」と名付けられた制度は、市内に在住している65歳以上の徘徊行動が見られるお年寄りを介護している家族や介護事業者を対象に、GPS機器を無償で貸与する。対象条件として介護認定の有無は問わない。家族らは事前に同市問屋町の「高齢者あんしん見守りセンター」に登録、お年寄りが行方不明になった場合に家族からの位置情報提供依頼に応じ位置情報を探知、メールで知らせる。

お年寄りの捜索・保護では、家族らが困難な場合は同センターの職員らのほか、警察官が行うケースもある。10日に同市と高崎署で「認知症高齢者の徘徊対策に関する協定書」を締結した。

貸与するGPS機器は最小サイズのもので重さ30グラム。当面は1千台を準備した。フル充電で2週間は稼働する。お年寄りに付けるため靴やリストバンド、衣服などさまざまな携行補助具が考えられているが富岡賢治市長は「付け方を工夫していきたい」と話している。

介護認定で徘徊の可能性があるとお年寄りは市内で約500人。運用開始前には関係者による連携訓練も予定されており、同課では「システムは介護する側の精神的負担軽減にもつながる」としている。

## 【漂流の果て—大阪・中1殺害事件（上）】裏切った再出発の誓い 「13年前と何一つ変わってない」

産経新聞 2015年9月21日

少年時代から孤立を深めていた山田浩二容疑者

「人生をやり直したいんです」。男は今年1月、初対面の50代女性の顔をじっと見つめ、そう懇願した。女性の目には、ひたむきで実直そうに映った。だが今にして思えば、男の本心はどこか別の場所を漂っていたのかもしれない。

女性が大阪刑務所（堺市）に服役している知人男性から「俺の弟分が真面目に働くと誓っている。面倒を見てやってほしい」と頼まれたのは昨年秋。この男性は、連続監禁事件で受刑していた1歳年下の男と知り合い、養子縁組までした。それが山田浩二容疑者（45）だった。

昨年10月に出所し、姓を変えて再出発した山田容疑者。

東京電力福島第1原発事故が起きた福島県内で、放射性物質の除染作業に真摯（しんし）に取り組んでいたはずだった。女性は「助けになってあげたい」と、山田容疑者が帰阪すれば自宅に招いて食事を振る舞った。

だが、期待は最悪の形で「裏切られた」。今年8月、山田容疑者が大阪府寝屋川市立中学1年の少女の遺体を遺棄した容疑で逮捕されたからだ。出所からわずか10カ月だった。

目の前で見せた殊勝な態度とは裏腹の卑劣な犯罪に、女性は言葉を選びつつ、こう言った。

「人間として、最低だ」

黒いハット帽を目深にかぶってうつむいたまま。姓こそ違っていたが、カメラのフラッシュを浴びて浮かんだ山田容疑者の横顔は、まぎれもなく当時中学生だった息子を襲った男の顔だった。連行される山田容疑者の姿をニュースで見た瞬間、寝屋川市に住む男性の脳裏には13年前の忌まわしい記憶がよみがえった。

「車に入れ」。平成14年3月、山田容疑者は寝屋川市内の路上で中学2年の男子生徒にナイフを突きつけて脅した。車内で手足を縛り、目や口も粘着テープでふさぎ、数時間にわたって監禁した。男子生徒は事件後しばらく、夜中に突然、大声を上げて泣き出すなど心的外傷後ストレス障害（PTSD）と似た症状を発症した。

結局、中高生の少年7人が同様の被害に遭い、山田容疑者が逮捕された。後に山田容疑者の親から手紙が届いたが、読み終えた瞬間、破り捨てた。「謝罪の文言はなく、減刑を求める内容ばかり」だったからだ。追い打ちをかけるように、山田容疑者の弁護士からも慰謝料5万円で減刑を求めるよう依頼された。

「なんで、全く反省もしていなかったこんなやつをまた世に出したんだ」。男性の怒りは収まらない。

山田容疑者は寝屋川市に隣接する枚方市の府営住宅で育った。少年時代にはすでに“漂流”が始まっていたのか、同級生らは「1人であることが多かった」と口をそろえる。

「これ、盗（と）ってきてん」。山田容疑者は近所の駄菓子屋で万引した商品を見せびらかしたり、自宅から1万円単位で親の金をくすねたりしては、「みんなに食べ物をおごって





やる」と自慢げに語った。

急にハサミを振り回すこともあった。小中学校の同級生だった会社役員の男性（44）は「彼は金で人を釣る。危ないタイプ」と語り、別の同級生の男性（44）は「ひとりぼっちだった」と振り返る。

30年を経てもなお取調室で自分の殻に閉じこもる。逮捕当初は「同乗者の男が女の子を殴り死なせた」と供述していたが、弁護士が接見した直後に一変。雑談にも応じず、捜査員と目を合わすこともない。手を膝に置いて下を向き「貝」になったままだという。

13年前の事件で10年以上も獄中で過ごし、一度は人生の「再出発」を誓った山田容疑者だが、捜査幹部は率直にこう語った。

「刑務所で何を学び、反省したのか。犯行の手口だけではない。彼は13年前と何一つ変わっていない」

中学1年の男女が殺害・遺棄された事件で、山田容疑者が死体遺棄容疑で最初に逮捕されて21日で1カ月。事件の背景を探る。

### 【漂流の果て—大阪・中1殺害事件（中）】 解明進まぬ男子生徒の「死」 同級生「なぜ殺

されたか知りたい…」 産経新聞 2015年9月22日  
星野凌斗さんの遺体が見つかった現場付近—8月27日午前10時7分（本社ヘリから、寺口純平撮影）



《天国でも元気でね》

メッセージが添えられた千羽鶴が静かに揺らめいていた。21日、大阪府柏原市の山中にある人目に付かない竹林。ちょうど1カ月前、寝屋川市立中1年の星野凌斗（りょうと）さん（12）の遺体が見つかった場所だ。

中学ではテニス部に所属し「楽しみながらテニスをやろう」が口癖。いつも笑顔で人気者だった。

そんな星野さんの死について、まだ誰も刑事責任を追及されていない。大阪府警高槻署捜査本部が逮捕している男の容疑はあくまで、殺害され遺体で見つかった同級生の平田奈津美（なつみ）さん（13）の事件についてのみのものだ。

現場近くの寺で副住職を務める男性（32）は1カ月間、遺棄現場を毎日訪れて読経を続けてきた。この日も静かに手を合わせて冥福を祈り、こう語った。

「真相が解明されなければ星野さんも浮かばれないし、近隣住民の不安も消えることはない」

8月21日昼ごろ、車を降りた男が、手ぶらでこの竹林に入った。少し離れた場所から捜査員が見つめる。竹林の陰に隠れ、何をしているかは分からない。だが「何か、ある」。

男が車に戻って立ち去ると周辺の搜索を始め、夜になって星野さんの遺体が見つかった。男は山田浩二容疑者（45）。「事件との関与を決定づける行動」（捜査幹部）だった。

半日前の同日午前1時過ぎ、大阪市北区堂山町の駐車場に軽ワゴン車がとまっていた。平田さんの遺棄現場（高槻市）付近の防犯カメラ映像から浮上した山田容疑者の車だった。捜査員はそこから尾行を開始、竹林にたどり着いた。

その後の捜査で、山田容疑者の堂山町での動きも防犯カメラ映像から確認できた。府警が今回の事件で解析した防犯カメラは少なくとも数百台に上る。直接証拠に乏しく、容疑者が黙秘する中、事件の立証には足取りを固めるしかない。

捜査幹部はため息交じりに言う。「空白の時間をなくし、第三者が関与した可能性を排除する。ただ、容疑者が口を開かない限り、真相は分からない」

「なぜ2人は殺されたのか。答えが知りたい」。平田さんと星野さんの同級生という女子生徒（13）は、黙秘を続ける山田容疑者に怒りをにじませる。

新学期が始まった8月24日、2人の机の上には花瓶が置かれていた。同級生らは2人に語りかけるように水を注ぐ。真相がもやに包まれた状態に、誰もが2人の死を受け止め

きれない。

平田さんと親友だった女子生徒（12）は事件後も、無料通信アプリ「LINE（ライン）」で、毎日メッセージを送っている。

《今何してるー？》

相手が確認したことを示す「既読」の文字が表示されることはない。「既読にならないかな」。女子生徒はスマートフォンを見つめる。

先日、同級生が集まって折り紙に1枚ずつメッセージを書きながら千羽鶴を折った。女子生徒は今の思いを9文字に込めた。

《戻ってきてほしいな》

### 【漂流の果て—大阪・中1殺害事件（下）】深夜徘徊に近づく悪意 「いつでも連絡」薄れる警戒心

産経新聞 2015年9月23日

京阪寝屋川市駅近くの商店街の防犯カメラに写っていた平田奈津美さんと星野凌斗さんの姿



「平田さんと遊びに行ってくる」。大阪府寝屋川市立中1年の星野凌斗（りょうと）さん（12）は8月12日午後9時ごろ、家族にそう言い残して家を出た。中1が出歩くには時間が遅い。友人らによると、同級生の平田奈津美（なつみ）さん（13）とともに「よく深夜に外をぶらぶらしていた」という。

この深夜、近くのコンビニ前で2人が話し込んでいる姿を40代男性が目撃した。「あの時、警察に連絡していれば事件は起きなかったかもしれない」。男性はため息交

じりに話す。

翌13日午前1時過ぎと午前5時過ぎ、2人が京阪寝屋川市駅周辺の商店街を歩く姿が防犯カメラに残っていた。2人は夜通し外で過ごしたことになる。

午前5時8分。商店街の防犯カメラに写った2人は突然立ち止まり、来た道に戻った。「誰かに呼び止められた」（捜査関係者）ようにフレームから消えた。生前の姿はこの映像が最後だった。

警察白書によると、平成26年中に補導された19歳以下の少年は約73万人。うち6割近い約43万人が深夜徘徊（はいかい）で補導されている。

大阪府は、深夜徘徊の割合がさらに高くなる。大阪府警の統計では、今年1～6月には補導全体のおよそ7割にあたる約2万8800人が深夜徘徊で補導され、昨年同期より約3300人も増加した。

「オールナイト徘徊」。教育評論家の尾木直樹氏は、少年少女らが深夜に外出し、街中で一晩中過ごす行為をそう呼ぶ。

なぜ深夜に出歩くのか。「今は24時間営業の店が多く、何より携帯電話で友達とつながっている。その安心感がハードルを下げています」と尾木氏は指摘する。

そして、親の問題もある。「『いつでも連絡がとれる』という考えは親にも蔓延（まんえん）している。メールや（無料通信アプリの）LINEはバーチャルなつながり。過信すると足をすくわれかねない」と警告する。

2人は事件当日も未明まで友人とLINEでやり取りしていた。いつでも、誰とでも、つながっていたはず。だが、事件を避けることはできなかった。

思春期特有の冒険心、家庭内のトラブル…。深夜徘徊の理由はさまざまだ。

「子供が何を考えているのか、大人は常に注視しないとイケない。真剣に向き合えば子供も応えてくれる」。同府警の元少年補導員で、今も夜の繁華街で少年少女らに声をかけ続ける野沢征子さん（73）はそう訴える。

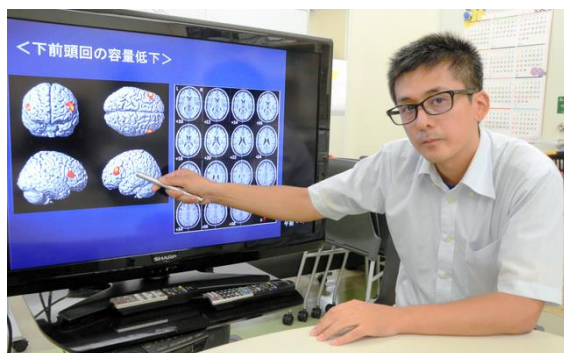
同府北部のある公共施設では、2年前から夜間に中高生の受け入れを始めた。多い日に

は10人ほどが集まる。中学2年の男子生徒(14)は深夜に何度か大人に声をかけられ、逃げた経験がある。「ここなら安心できる」。そう言って職員らと鍋料理を囲んでいた。

「子供を危険から守るだけではない。人とのつながり、居場所を提供する役割もある」。施設の職員(25)はそう信じる。

犠牲になった2人は、何を求めて街を夜通し“漂流”したのか。2人を見つけたのは「悪意」だった。

### 福井) 拒食症の10代女性は脳が縮小 福井大チーム発表 朝日新聞 2015年9月23日



拒食症患者の脳の状態を説明する藤沢隆史特命助教=永平寺町松岡下合月

拒食症の10代の女性は、健康な同世代女性と比べて、行動や感情を抑制する脳の部位「下前頭回(かぜんとうかい)」が縮小している——。福井大の藤沢隆史特命助教の研究チームのそんな論文が、6月11日付で米科学誌プロスワン電子版に掲載された。

研究チームは、拒食症と診断された12～17歳の女性20人と、11～16歳の健康な女性14人の脳を磁気共鳴画像装置(MR

I)で撮影して比較した。平均すると、拒食症の女性の脳は栄養不足の影響などで容積が約10%少なく、前頭前野の一部で行動や感情を抑制する「下前頭回」は左が19・1%、右が17・6%減少していた。拒食症が原因で下前頭回が縮小するのか、縮小のために拒食症になるのか因果関係は不明という。

拒食症は摂食障害の一つで、若い女性に多い。食事量を極端に制限し、やせた状態になっても体重が増えることを恐れ、食べては吐くことを繰り返す人もいる。身体と心理面の両方の治療が必要とされている。

### 支援物資と必要な品物 食い違いの解決が課題

NHK ニュース 2015年9月23日



「関東・東北豪雨」で大きな被害を受けた茨城県常総市では、支援物資が数多く寄せられる一方で、住民が必要とする一部の品物が不足していて、こうした食い違いを解決することが課題となっています。

常総市では、全国各地から寄せられる支援物資を市内2か所の体育館に集めて仕分けなどの作業を行ったうえで、被災した人たちに希望する品物を提供しています。

市によりますと、中古の衣料品や高齢者用の紙おむつなど一部の品物が集中して寄せられ、ボランティアの人たちが数百人集まって仕分けを行っても作業が追いつかず、こうした物資が少なくとも数十トンにのぼっているということです。

一方で、住宅の片付けなどに使われるスコップや洗剤、それに殺虫剤などは不足しているということで、集まる支援物資と住民が必要とする品物との食い違いを解決することが課題となっています。

常総市商工観光課の町田春吉課長補佐は「インターネット上で情報が広がって同じ物資が集まる傾向にあり、とてもありがたいが、困る面もある」と話しています。

常総市は、市のホームページで住民が必要とする品物の情報を更新していて、情報を確



認してから物資を送るよう呼びかけています。

**社説：生殖医療の議論を深め合意形成目指せ** 日本経済新聞 2015年9月23日  
子どもを持ちたいという夫婦の切実な願いに、科学技術はどこまで応えていくべきなのか。国民的な合意がないままに実態が先行しているのが、生殖補助医療だ。

卵子提供や代理出産など、第三者がかかわる不妊治療は、多くの課題をはらんでいる。生まれてくる子どものためにも、法整備を含めた制度づくりを急ぐ必要がある。多くの国民が納得できる合意点を探らなければならない。

焦点の一つは、卵子提供による不妊治療だ。今年7月、無償ボランティアからの卵子提供をあっせん・仲介する民間団体が、体外受精に成功したと発表した。

卵子提供を認めるのか、その場合の条件は何か。日本には公的なルールも、それを裏付ける法律もない。姉妹など身近な人から提供を受け、出産するケースもある。もはや議論を先送りできる段階ではないだろう。安全性の確保はもちろん、どんな人が提供者になりうるかなど、慎重な検討がいる。

何より、生まれてくる子どもの利益を最優先で考える必要がある。日本では第三者からの精子提供がすでに普及しており、遺伝上の親を知りたいと悩む子どもたちがいる。こうした自然な気持ちにどう配慮するかは大きな焦点だ。

代理出産は、さらに課題が多い。代理出産を依頼するために日本から海外に渡る夫婦がいるという現実はあるが、とりわけ女性の身体を出産の道具に利用することには倫理的に大きな問題がある。

議論が高まった時期はあった。厚生労働省審議会の部会は2003年、代理出産を禁じ、卵子提供は一定の条件で認める報告書をまとめた。08年には日本学術会議が、代理出産を原則禁止とし、公的管理下での試行の道は残す報告書を出した。だがいずれも、具体的な動きにはつながらなかった。

民法は第三者がかかわる不妊治療で子どもが生まれることを想定していない。自民党内には、民法の特例法を定めて親子関係を明確にすべきだという動きもある。

生殖補助医療への受け止め方は文化や価値観によって異なる。英国やフランスなど法制化した国でも、認める医療の範囲など具体的な内容はさまざまだ。

一人ひとりの家族観もからむ問題だけに、日本でも多様な意見があるだろう。不妊に悩む夫婦は多い。望ましい制度づくりに向け、私たち一人ひとりが身近な問題として捉え、考えていきたい。

**国勢調査の書類を一時紛失 泥酔の堺市職員「盗まれた」** 共同通信 2015年9月21日

堺市は21日、100世帯分の氏名や住所、世帯人数などの個人情報に記載された国勢調査用の書類を、調査の指導員で上下水道局経営企画課の男性主査（34）が、泥酔した状態で一時紛失したと発表した。

市によると主査は当初、「19日午前2時ごろ、JR阪和線百舌鳥駅前で、書類や職員証明書が入ったかばんを横に置いたまま寝入り、盗まれた」と説明。だが実際には19日早朝、3駅離れた鳳駅に届けられていた。書類のほか、現金なども残っていたという。主査は同日に自分で探したが見つからず、翌20日は朝からゴルフに出掛け、夕方ゴルフ場で上司に打ち明けた。市に届けたのは同日夜だった。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行